

History and Culture of Chongqing（重慶）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 管, 維良, 水盛, 涼一 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24

重慶の歴史と文化

管 維 良：著
水 盛 涼 一：訳⁽¹⁾

人がいればそこには歴史が存在する。人類の歴史はまさに人類の誕生からはじまるのである。重慶にはいつごろから人類が活動していたのだろうか。1985年から1986年にかけて、古人類学〔paleoanthropology〕の学者と考古学調査発掘隊は、重慶市の巫山県でアジアそして中国における最古の人類化石を発見した。科学的測定によれば、その年代は今から200万年ほど前のもので、「直立人巫山亜種」〔*Homo erectus wushanensis*、ホモ・エレクトス・ウシャネンシス、巫山原人〕と命名された。略称を「巫山人」という。

どうして長江の三峡地域が中国そしてアジアにおける人類の発祥の地となったのであろうか。その原因には色々と考えることができるが、かの地が人類の最も必要とする塩を生産したことこそ主要な要因といえるだろう。現在の〔重慶市〕巫溪県の寧廠鎮にある宝源山の塩泉には、人類の祖先すなわち古代の類人猿が集まり、塩泉を味わい、少しずつ人類へと進化していったことであろう。新石器時代に入ると、人々は陶器を発明して塩水を煮沸し塩を生産するようになった。そして民族共同体が広く分布し、考古遺跡が数多く残されることとなった。これは同時代のその他の地域では見られないことである。その状況を文献が反映したものだろう、『山海経』には巫山の十巫、あるいは巫山の六巫の名がみえる⁽²⁾。濃厚な巫術の文化の存在は、彼の地に人類の早期の文化があったことを反映しているのである。

各巫の文化のなかで⁽³⁾、ひとつの偉大な氏族が育まれた。それが巴族である。『山海経』第十八「海内経」には以下のような記載がある。

西南には巴国がある。太皞は咸鳥を生み、咸鳥は乗鰲を生み、乗鰲は後照を生んだ。後照は巴の人の祖先である。

この文言は巴についての歴史の謎を解明する鍵であり、後の巴族誕生の歴史と塩とが密接な関係にあることをあらわしている。太皞〔すなわち中国神話における始祖神の伏羲〕

⁽¹⁾ 本稿の（丸括弧）は原著者による注、また〔亀甲括弧〕および脚注は訳者による補注である。

⁽²⁾ 『山海経』第十六「大荒西経」には巫咸、巫即、巫参、巫彭、巫姑、巫真、巫禮、巫抵、巫謝、巫羅の十巫が、また『山海経』第十一「海内西経」崑崙には巫彭、巫抵、巫陽、巫履、巫凡、巫相の六巫がみえる。

⁽³⁾ 巫咸や巫載といった氏族共同体を諸巫部落盟などと呼称する場合がある。屈小強・任麗潔「巫載文化帶的形成及其歷史地位」（『重慶三峡学院学報』一九九四年第四期）、管維良・林艶「三峡巫文化初探」（『三峡大学学报（人文社会科学版）』二〇〇五年第一期）、滕新才・楊用超「当代巫山歷史文化研究評述」上・下（『重慶三峡学院学報』二〇一二年第一・第二期）などを参照のこと。

が咸鳥を生んだわけだが、これは太皞と咸鳥とが同時代の非常に古い存在であり、今より五千年もの時間を距てることをあらわす。古代の「咸」〔鹹〕の字は「塩」の字と通じるのであるから、咸鳥とは塩鳥すなわち塩を運ぶ鳥であろう。巴人は〔鳥がはばたくように〕二本の櫂を漕いで長江に巫山の塩を運搬しただろう。それが文献にあらわれる巴族の歴史の最初期の姿である。また、咸鳥が乗鰲を生んだというが、乗とは登載するという、運搬をあらわすだろうし、鰲とは管理の意である。運搬するものは上述のとおり塩なわけであるから、これは巴族が「咸鳥」時代からすでに結束して塩を運搬しており、また「乗鰲」時代に至って塩を広く販売していたことを象徴しているといえよう。そして乗鰲が后照〔后炤とも〕を生むわけだが、后とは君主であり、照とは灶〔かまど〕の謬語である⁽⁴⁾。巴族はすでに塩を買い販売する事に比べ、自らカマドを造り塩を煮沸した上で供給と販売をとも行いうほうが遥かに利益率が高いことを認識していたことであろう。ここから、「后照」時代には〔塩を生産するかまどを支配する人物が咸鳥・乗鰲として販売も行い〕巴族が自ら生産し販売するに至っていたことをうかがうことができる。巴族が塩泉で塩を生産し販売するなか、その力はいよいよ強大となり、「后照は巴の人の祖先」となったのであった。こうして、巫山の諸部族は〔塩の販売を行う〕巴族を大巫山の部族集団の一員と認め、〔重慶方面に住む部族の総称としての〕巴族が誕生したのであった。

巴族は強大になるにつれ、四方へ異動していった。そのうち一支は南のかた巫山を越え夷水に到った。夷水とは現在の湖北省西部の清江である。そして大巫山より来た四姓と連合し⁽⁵⁾、巴氏の務相を廩君なる名の首領とする部族を結成し、また付近を流れる〔清江の支流の〕塩水の女神を崇める部族を併呑し、夷城を首府としたのであった⁽⁶⁾。しかも〔長江支流の烏江のさらに支流である〕郁水〔郁江とも〕のほとりにあった豳国をほろぼし、〔重慶市の彭水苗族土家族自治县にある〕郁山の塩泉を奪取した。また巫山から北上し、枳邑（今の重慶市涪陵区）を制圧、東のかた鬼国を滅亡させ、また西のかた江州を占領した。そして川を濠として山の上に城を築き、江州（いまの重慶市渝中区）を都として巴国を建設したのであった。周の武王による殷の紂王討伐の戦争へ参加してその先鋒となり、〔勇猛な近衛兵である〕「虎賁の師」と号し、戦いの歌や戦いの踊りにより敵の士気を威圧したため、殷側の兵を造反せしめ、殷を滅亡させるという大功をあげることとなり、子爵に封ぜられ、姫姓の宗室がおさめる〔子爵の巴の国という意味の〕巴子国とまでなったので

⁽⁴⁾ 現行の『山海経』はもとより『太平御覧』巻一六八「州郡部十四」「山南道下」「渝州」に引用される『山海経』等でも「乗鰲后有照」とする。ただし南宋の羅泌『路史』巻十「後紀一」「禪通紀」「太昊紀上」には「伏羲生咸鳥。咸鳥生乗鰲、是司水土、生后炤。后炤生顧相、卒处于巴。是生巴人」とあり、また王象之は「巴国考」（周復俊編『全蜀藝文志』巻四十八）において「山海経云、西南有巴国、又云昔太皞生咸鳥、咸鳥生乗鰲、乗鰲生后炤、是為巴人」と述べ、后炤や后昭といった表記を伝えている。

⁽⁵⁾ 『後漢書』列伝第七十六「南蛮西南夷列伝」によれば、廩君となった務相は樊氏、瞿氏、相氏、鄭氏の四姓を臣下としたという。

⁽⁶⁾ 管維良「郁山塩泉与巴国興衰」（『三峡論壇（三峡文学・理論版）』二〇一〇年第三期）を参照のこと。

あった⁽⁷⁾。

巴国は江州を首都としていた他、平都（今の重慶市宝都県）、墊江（今の重慶市合川区）、閬中〔四川省南充市閬中市〕を副都としており、最盛期には東のかた奉節〔今の重慶市奉節県〕、北のかた漢中〔今の陝西省南部の漢中市〕、西のかた宜賓〔四川省東南部の宜賓市〕、南のかた黔北〔今の貴州省北部で現在の遵義市を中心とする地域〕を版図とするに至った。そして西暦紀元前 316 年に秦に滅ぼされたのである。〔蘇秦とともに縦横家として知られ合従連衡をとともに演出した〕張儀ひきいる軍により巴国が滅亡したのち、巴国の故地には巴郡が設置され、江州に巴郡そして江州県の首府が置かれ、〔長江と嘉陵江が鋭角に交わるため渝中半島とも称される〕半島状の地形の突端に江州城が建設されたのである。これが重慶での初めての築城となった。巴族の文化内容は豊富で、独自の言語があり、独自の絵文字があり、独自の戦いの歌や戦いの踊りがあり、独自の祭祀や歌舞があり、独自の居住形式——高床式建築⁽⁸⁾——があり、独自の頭髪である「弼頭」があり⁽⁹⁾、独自の青銅兵器——〔刀身中央がやや膨らみ柳の葉のような〕柳葉式剣、〔中国伝統の巾着袋のように寸詰まりで刀身が大きく膨らむ〕巾着様鉞、〔木製器具に差し込むソケット様の「駁」が短い〕短駁矛、〔刀身が張り出して後方に展開する〕双翼式戈、〔刀身が二等辺三角形のような〕三角形戈、そして楽器の〔虎のツマミが溶接された銅製鼓楽器である〕虎鈕鐃干など——があった。

巴族は尚武の気風を持ち、勇猛に戦い、秦に加勢し楚を討伐し、また漢を助けて項羽の楚を滅ぼした。六朝時代〔222 年～589 年〕から隋〔581 年～618 年〕、唐〔618 年～907 年〕の時代には西晉を助けて呉を滅ぼし、隋を助けて陳を滅ぼし、唐を助けて〔隋末の群雄の一人で現在の湖北省荆州市を中心に梁を再興した〕蕭銑を滅ぼしている。こうした歴代の統一戦争のなかではみな抜群の功績を挙げたのである。

三国時代の蜀漢の時〔建興四年春〕には都護の李嚴が江州に「大城」を築いたが、その「周囲は十六里」であった。西暦 583 年には隋の文帝が明清の重慶城の前身を渝州と名付けた。唐代には〔渝州城のある現在の重慶市渝中区に対し長江を超えた南岸にあたる〕現在の重慶市南岸区に南城を建設し、また今の嘉陵江の〔渝中区から見て〕対岸において漢

⁽⁷⁾ 『華陽国志』巻一「巴志」には「周武王伐紂、実得巴蜀之師、著乎『尚書』。巴師勇銳、歌舞以凌殷人倒戈。故世称之曰「武王伐紂、前歌後舞」也。武王既克殷、以其宗姫封於巴、爵之以子。古者遠國雖大、爵不過子。故呉楚及巴皆曰子」とある。

⁽⁸⁾ 藍慶元「也談“干欄”的語源」（『民族語文』二〇一〇年第四期）によれば、原文の「干欄式建築」とはタイ・カダイ語族の言葉で部屋を表わすという。

⁽⁹⁾ 常璩『華陽国志』巻一「巴志」第六「夷人安之。漢興、亦從高祖定秦有功、高祖因復之、專以射白虎為事、戸歳出賣錢口四十。故世号白虎復夷。一曰板楯蛮。今所謂弼頭虎子者也」について任乃強は『華陽国志校補図注』（上海古籍出版社、一九八七年十月）において板楯蛮が平らな楯しか製造できない拙劣な技術力でありながらも勇猛で知られたこと、また「弼」が強弓を指し「勢」などとも記載され、現地に強姓のものが多くことから「弼頭」を強力の意に解している。なお四川省徳陽市広漢市の三星堆博物館に所蔵される三星堆二号祭祀坑より出土した青銅跪坐人像は太い直毛を後上方へ梳きあげる特殊な頭髪様式をとる。

代に建設された北府城を保存して継続的に使用することとし、渝中半島の渝州の主城とあわせ〔川をはさみ南北に並ぶ〕三城が支え合う体制を形成したのであった。偉大な詩人である王維〔701年～761年〕は「明け方に巴の峡谷を行く」において渝州の大城を描写し以下のように歌う⁽¹⁰⁾。

水郷では舟の中で市場が立ち、山中の橋は樹々の梢の上を行く。高みに登ると村々の家が見え、遙か彼方には二筋の流れが光る。

一幅の山城の光景が紙上にありありとあらわれるようではないか。

中国の唐王朝の時代とは詩歌の時代であり、渝州もまたよく詠じられた。〔劍南道梓州〕射洪県〔現在の四川省遂寧市射洪県〕出身の才子であった陳子昂〔661年～702年〕は、〔現在の重慶市北碚区にある〕嘉陵江小三峡を過ぎたとき、佳句を残した⁽¹¹⁾。

風景は眺めることができるが歌声は殷々とこだまして聞き取れない。河をうねうねと下ると青山があわさり、峰々が交互にあらわれ陽も隠れる。

大詩人の李白〔701年～762年〕は「巴女のうた」で歌う⁽¹²⁾。

巴の川の流れは矢の如く、巴の船は飛ぶが如く、十ヶ月も離れ三千里の彼方にいるあなたは一体いつになったらお帰りになるの。

有名な詩人の司空曙〔720年ごろ～790年ごろ〕は詩歌をもって渝州の繁栄を下のように描き出した⁽¹³⁾。

紅の提灯をかかげた渡し場で君に会う。管弦がテンポ良く鳴り響き雨が降るようだ。

明け方に別れて静寂とした川を行けば、ただ猿の声のみが嘯々と水面にこだまする。

また偉大な詩人の白居易〔772年～846年〕は〔山南道に属し現在の重慶市忠県にあたる〕忠州の刺史として赴任していたとき、渝州城に到り南岸の塗山寺を訪問したときに⁽¹⁴⁾、

野の道を一人の伴もなく行く。僧坊に宿をとることひとしきり。塗山の往来には慣れたもの、ただ馬の蹄のみがそれを知る。

と歌っている。李商隱〔813年～858年ごろ〕の「夜雨に北に寄せる」は人口に膾炙した名編であるが⁽¹⁵⁾、そこでは

何時お帰りますの、とお前は尋ねるが、まだ何時のあてはない。巴山では夜の雨が降り続いて秋の池を漲らせている。あの西向きの窓でお前と二人夜更けまで灯心を切りつつ語りあうことが出来るのは何時のことか。その時こそ巴山に雨が降っている今の私の心を語りあえるのだが。

⁽¹⁰⁾ 王維『王右丞集』巻十二「近体詩十六首」「曉行巴峽」。

⁽¹¹⁾ 陳子昂『陳伯玉文集』巻一「詩賦」「入東陽峽与李明府舟前後不相及」。

⁽¹²⁾ 李白『李太白詩』巻二十五「閨情」「巴女詞」。

⁽¹³⁾ 司空曙『司空文明詩集』「發渝州却寄韋判官」。

⁽¹⁴⁾ 白居易『白氏長慶集』巻五十五「律詩凡一百首」「塗山寺独遊」。

⁽¹⁵⁾ 李商隱『李義山詩集』巻六「七言絶詩」。なお、余金龍「李商隱〈夜雨寄北〉詩考」（『育達研究叢刊』第四期、二〇〇三年三月）は大中六年（852年）のことであろうと推測する。

と歌っている。これは重慶一体の風物詩を詠み込んだものである。

長江三峡〔いわゆる三峡を指す〕はその雄偉にして際立つ美しさで人を圧倒してきており、道すがら三峡を通るものは多くの詩歌を謳ってきた。その中でも最も著名なものといえば李白の「朝に白帝城を発つ」を超えるものはなかろう⁽¹⁶⁾。そこでは

朝早くに美しい色の雲がたなびいている〔重慶市奉節県の長江三峡に位置する〕白帝城を出発し、千里の江陵を一日にして還ってきた。兩岸で啼いている猿の声がまだ耳に残っているうちに、軽やかな小舟は幾万に重なる山々の間を一気に通過してしまった。

とうとう。また杜甫は西暦 766 年に〔山南道で現在の重慶市奉節県にあたる〕夔州に住んだとき、夔州の山水、風土や人情に詩想を刺激され、430 首以上の詩歌を執筆した。これは現存する杜甫の詩のうち三分の一にあたる。その著名な詩句「白帝城」では⁽¹⁷⁾、

白帝城の城門から雲が湧き出している。城下では雨がお盆を返したように降りしきる。高い山や急な谷には雷霆がとどろいている。古木が立ち枯れ蒼藤が茂り日月も暗くなっている。戦馬などより戦闘から帰耕した馬こそが楽しかろう。以前は千戸もあった集落は今では百戸ばかり。哀しげな未亡人が税に苦しんで秋の野に慟哭しているが何処の村のものだろう。

と歌い、また「夔州のうた十首」では⁽¹⁸⁾、

巴国のなかほど東部の巴東山、川の水はその間を開いて流れ下る。白帝城ははるか高みで三峡に鎮座し、夔州の険は〔現在の陝西省漢中市勉県の西南にある〕百牢関まで打ち続く。

と歌い、「八陣図」では⁽¹⁹⁾、

〔諸葛孔明の〕功績は魏呉蜀の三国すべてを覆い、その名も八陣図を練り上げ〔て呉の陸遜を退け〕た。しかしなおその流れは石を動かすにはいたらず、遺恨なるは呉を併せられなかったこと。

と歌っている。

西暦 1102 年、北宋の徽宗は渝州を恭州とあらため、1189 年には南宋の光宗が恭州を重慶府として昇格させた。宋代には重慶の経済は一躍発展しており、棚田が大規模に建築修理され、水を溜めて田を潤し、水稻を植え、ときには二期作が行われた。〔川峡路の夔州路にある〕南平軍（いまの重慶市綦江区）で生産された茶葉は〔チベット系の青唐の馬と中国の茶とを交換する〕茶馬交易の重要拠点となった。南岸区〔で渝中半島の東側にあたる〕塗山窯で生産された黒釉葉の磁器は当時の著名な磁窯として知られ、〔川峡路の潼川

⁽¹⁶⁾ 李白『李太白詩』巻二十二「行役」「朝発白帝城」。

⁽¹⁷⁾ 杜甫『杜工部詩』巻一「雨雪」「白帝城」。

⁽¹⁸⁾ 杜甫『杜工部詩』巻四「都邑」「夔州歌十絶句」。

⁽¹⁹⁾ 杜甫『杜工部詩』巻十五「軍旅」「八陣図」。

府路で現在の重慶市合川区にあたる〕合州は宋代において造船業の一大中心となっていた。経済的發展は商品經濟の發展をうながし、「〔長江と嘉陵江の〕二江の商業はまことに盛んで、船の楫がたびたび交錯するほどである」と言われる盛況を形成したのである⁽²⁰⁾。時の人は渝州を「商人が往来し、貨幣が行き交い、水系を上下するものは数知れず」と称えている⁽²¹⁾。

南宋の後期には政治腐敗が発生し、またモンゴル帝国が大挙して南方へ進出してきた。こうして四川は重要拠点となり、重慶はその重要拠点の重点となったのである。これがために、四川制置副使で重慶府の知事であった彭大雅は戦間期に重慶府城を増築し、防御能力を向上させることに心を砕き、重慶を対モンゴル戦の指揮を執る中軸とし、また流れに逆らって毅然と立つ精神的支柱としたのであった。1241年に余玠が四川安撫制置使となると四川方面の防衛を行う上で制置使府を〔成都府より〕重慶府へと遷したのである。余玠は山城による防御体系を採用し、20あまりの山城を交通の要衝に設置して、相互に呼応する体制を作り上げたため、モンゴル軍の進出に対して有効に対処することが出来た。〔重慶市合川区にあたる〕合州釣魚城は釣魚山の上に設置され、大小およそ二百回あまりの戦闘に、なお宋側の拠点として巍然と屹立したのである。西暦1258年にモンゴル帝国の大ハーンであるモンケが三方より宋に攻め寄せたが、みずからは主力の四万を率いて四川へ侵攻し、1259年2月には釣魚城のもとに到着、組織的に釣魚城を囲んだのであった。しかも7月には〔重慶市合川区の〕脳頂坪にて釣魚城の守将であった王堅が砲撃によりモンケへ重傷を負わせ、モンケは〔重慶市北碚区の〕温湯峡にある温泉寺で死亡した。こうして釣魚城は対モンゴル戦線において偉大な勝利を獲得したのである。

宋代もまた同様に詩歌が流行した時代であった。三蘇〔現在の四川省眉山市東坡区出身である父の老蘇すなわち蘇洵、兄の大蘇すなわち蘇軾、弟の小蘇すなわち蘇轍を指す〕は何度も三峡へ足を運び、多くの詩を作成している。蘇洵は「題白帝廟」として⁽²²⁾、

〔『太平広記』巻五十六「雲華夫人」には『集仙伝』を引き夏の禹王が切り開いたというが〕誰が三峡をこのように堅固に切り開いたものか、〔杜甫が『杜工部詩』巻六「蜀相」で歌うように〕とこしえに群雄を苦難に導く。〔春秋戦国の楚王国の王族である〕熊氏はもう凋落しその他の名門もいなくなり、〔後漢初期に〕国を建てた公孫述はひっそりと空城を放棄した。〔白帝城を改名した〕永安宮に〔呉軍と荊州の覇権をめぐって戦い敗北して〕死んだ劉玄德を悲しみ、石兵八陣を練り上げ精根尽き果て〔ながらも陸遜を追い払うに過ぎなかった〕諸葛孔明を残念に思う。白帝には靈驗あって荒爾と笑うばかり、諸公はどうして兵事だけで敗れたものか。

と歌っている。また南宋の詩人である范成大は四川で官途についたとき、当時恭州と呼ば

⁽²⁰⁾ 王象之『輿地紀勝』巻一七五「重慶府」「旧題名記」。

⁽²¹⁾ 『宋代蜀文輯存』巻七十八が『四川通志』巻五十に掲載される南宋の冉木「心舟亭記」を引く。

⁽²²⁾ 現行の蘇洵『嘉祐集』には無く、宋版『類編増広老蘇先生大全集』にのみ見られる。

れていた今の重慶に到り、「夜に恭州に宿る」の一首を詠んで⁽²³⁾、

草山は瘦地で田畑もしぜん固くなるが、村落はよろこんで粟や豆を収穫する。竹林や川のほとりの村は〔四川の雅称である〕錦里というほどではないけれど、清いせせらぎに夜月がのぼり私は渝州に到着する。小さい楼阁が盤石の高いところにあれば鱸網〔ともづな〕は東に西に急流と戦っている。峡に入ればすぐに風物が変わりゆき、布のスカートをはいた裸足の婦人がみなコブをたれる。

と重慶の風物を描写している。また四川安撫制置使の余玠は、

〔重慶城東方の〕望龍門から東へいけば河水は天と和し、渡河を待つ旅人はしばらく息を休める。これから夕暮れになれば往来は忙しげとなり、水面に争うは夕陽の船。

という「黄桷晩渡」を歌っている⁽²⁴⁾。

〔重慶市大足区の〕大足石刻は南北宋の代表作で、中国後期石窟のひとつの到達点となっており、世界文化遺産にも登録されている。主要な石刻はおおむね大足北山と宝頂山にある。大足北山には石刻彫刻のある小型の摩崖石窟が264基存在し、その多くは観音、地藏、阿弥陀仏が彫られており、なかでも136号窟は最も優美である。宝頂山の大仏湾〔という名の地域〕は規模が最大で、馬蹄形の長さ500メートル、高さ15から30メートルの断崖に31組の大型彫像が彫り込まれている。内容は前後が関連しており、經典の文言を配置して彫像を説明している。その中の華嚴三聖像〔毘盧遮那仏、普賢菩薩、文殊菩薩の三像〕は氣勢も雄偉で高さは7メートルに達する。また千手観音像は壮麗を極め、1007の手を孔雀の翼のように上方、左右の三方から展開している。涅槃仏の長さは31メートルで、上半身のみが彫られ、下半身は岩の中に隠れているようで、参観者へ思いを馳せさせ仏陀の偉大さをあきらかにしている。宝頂山の石刻には濃厚な生活の気風もあり、たとえば鶏飼い女、笛吹き女、また〔牛を脇に牧童二人が肩を抱きあう〕牧牛風景などがあり、なかでも父母恩重経変相は父母が子女を養育した苦しい過程を生き生きと描き出しており、民間風情を伝える一幅の絵となっている。

明朝初年の1371年（洪武四年）、重慶の指揮使であった戴鼎は、もともとの城の基礎の上に重慶城を修築した。〔清朝の〕乾隆『巴県志』には以下のような記載がみられる。

明朝の洪武初年に指揮の戴鼎が以前の基礎により石城を建設した。高さは十丈、周囲は二千六百十七丈七尺、周囲の川を濠とし、門は十七、九門をひらき八門を閉じて九宮八卦〔天の領域を井形に分けた九区域すなわち九宮を『易経』の八卦に配当する考え。奇門遁甲にも援用され、水滸伝には九宮八卦陣が登場する〕をかたどったのである。

⁽²³⁾ 范成大『石湖居士詩集』卷十九「恭州夜泊」。日本では随分と流行したようで、江戸時代に訓点を施した『石湖先生詩鈔』、『石湖詩』、『石湖詩』（詩詞雑俎本）、『蜀中詩』などが刊行されている（すべて長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』十五「宋詩五」汲古書院、一九九二年二月に収録）。本詩も『蜀中詩』巻下に載る。

⁽²⁴⁾ 『蜀中広記』巻十七「重慶府巴県附郭」「黄桷晩渡」。

その開かれる九門のうち、朝天門、東水門、太平門、儲奇門、金紫門、南紀門は長江に面しており、臨江門と千厩門の二門は嘉陵江に面し、通遠門のみが西側より陸路へと接続している。

明末清初には重慶も長期の戦乱に巻き込まれ、土地は荒廃し人口は激減することとなった。順治年間〔1644年～1661年〕には四川には僅か耕地が一万頃あまりとなってしまう、明朝時代の十分の一にも及ばない状態であった。しかも、たとえこの状況であっても、「耕せる田があるものの耕す民がいない」のであった。政府統計によれば康熙二十四年（1685年）にあってなお戸数は18,000戸であり、人口は九万人たらずであった。そこで四川の経済を回復するため、清朝政府は移民の導入を企図し、外地へ逃げ延びていた四川人を本籍地へ帰還させるとともに、とくに四川省以外の出身の人間を募集して四川で「挿占落業」〔入植者が耕せるだけの土地を思うがままに占有して草を挿して目印とし自己の不動産とすること⁽²⁵⁾〕させて開墾を行い、官吏にも民衆を募集しての開墾を奨励したのであった。移民のなかでは湖広地方（今の湖北省や湖南省）の出身者が最多であり、また他の省の出身であっても湖広地方を経由して四川へ入植してきたのであった。ゆえに史上ではこの人口移動を「湖広填四川」〔湖北省・湖南省が四川省を填める〕と言うのである。こうして大量の人口が移入してきたため、労働力が増加、土地も開墾され、結果として経済が発展していったのである。そして重慶の経済的な地位も迅速に上昇し、重慶を紐帯とする商業貿易網が形成されていった。長江の主要な支流である嘉陵江、岷江、沱江流域で生産される穀物、棉、塩、糖は川を下り〔長江上流域にあたる〕重慶に集中し、そして〔中流域の〕漢口へ運ばれ、そして〔下流域の〕蘇州へといたるのである。この長江ラインこそが米、木材、塩、棉、布、西洋産品運搬の大動脈であり、重慶は長江東西貿易の起点であり、長江上流商品の集散地なのである。

清代の80%の四川人は全国各地からの移民である。各地の多様な声色の芸術が移民を通して四川に流入し、四川にもともと存在した声色の芸術と一体となり、「川劇」〔四川風劇〕を産み出した。高腔〔高い調子〕の川劇は江西の弋陽腔〔現在の江西省上饒市にある弋陽県に発祥した高い調子の歌の節回し〕が発展して成立したものであるし、江蘇省の崑曲〔現在の江蘇省蘇州市にある崑山市出身の魏良輔が完成した歌曲および節回し〕が四川に流入して「川崑」〔四川風崑曲〕となり、西皮〔音が大きく跳躍する旋律で複雑なリズムを持ち、感情の高ぶりを表現する〕や二黄〔ゆっくりとしたテンポで、叙情や悲哀を表現する〕の節回しを持つ川劇胡琴戯〔胡弓伴奏を伴う四川風劇〕をも包括するのだが、この調子は湖北漢調〔湖北省の武漢を中心とする節回し〕が発展して流入したのもでもあり、また川劇の乱弾〔格律に厳格な崑曲や弋陽腔以外の伝統劇の総称〕は陝西省の秦腔〔柏子木を入れて調子を高めたり胡弓や梆笛を伴奏楽器とする劇調〕が四川に入って変容したも

⁽²⁵⁾ 詳細は孫和平「“落担”、“挿占”——“湖広填四川”的早期民俗記憶」(『成都大学学报(社会科学版)』二〇〇八年第四期)を参照のこと。

のである。ただ灯戯〔旧正月や灯節といった祝祭に四川で行われる伝統演劇〕のみが四川省独自のものである。ここからみれば、川劇とは移民の文化の産物といえることができるだろう。

1891年には重慶海関〔税関〕が成立し、関税の徴収を開始し、重慶は諸外国に開港したのであった。開港の後には中国産品が大量に輸出され、また西洋の産品が多く入ってくることとなり、四川の木造船舶による運輸業が反映することとなった。また〔1892年の時点で⁽²⁶⁾〕民間船舶1,800艘あまりが合計4.3万トンもの貨物を搭載して入港しており、また1899年には2,900艘あまりが10万トンもの貨物を搭載して入港したのであった。20世紀初頭にいたると、重慶は毎年民間船舶が二万艘入港し、貨物はなんと50万トンにも達した。宣統年間の統計によれば、四川で〔船舶が川を上るときに両岸より〕船曳をする人夫は200万人を超え、周囲より重慶を経由して輸出される貿易活動や水上運輸の発展により、重慶は長江上流で最大の水上・陸上の商業拠点となったのであった。こうした商業拠点の文化を明確に体现しているのが、現今の「火鍋」料理〔中国風の寄せ鍋〕の出現である。

200万人にも及ぶ船曳人夫や数十万人にも及ぶ埠頭労働者は収入も少なく、ボロを着て街頭や道ばたで貧しい食事をするのみであった。20世紀初頭になると港湾地区に棒天振が出現し、ある大衆的な軽食を販売し始めた。その原料は牛の下水〔中国では内臓を指す〕約七、八種で、「水八塊」〔八種類の「下水」の意〕なる名前であり、南紀門の宰房街あたりから出される値段のつかないような牛の蹄や内臓を利用したため価格もきわめて安く、しびれるように辛い塩味のスープに入れて提供され、スープあるいは食事として飲食されたが、まさにこの料理は機運に応じて生まれたものといえよう。1926年の前後には宰房街の町角にいたイスラム教徒の馬氏の兄弟が、市井の「水八塊」の製法に芝麻醬〔ゴマを炒ってすりつぶしたみそ状の調味料〕や蒜泥〔ニンニクをすりつぶしたもの〕を入れて味をまろやかにし、牛の胃袋を中心に四季の野菜を入れ、ちゃんとした台所を持つ店舗を出店し看板を掲げた。こうして中国の飲食史上に人々の食欲を誘う重慶毛肚火鍋〔毛肚とは牛の第三胃であるセンマイ〕が卓越したものとして世にあらわれたのであった。

⁽²⁶⁾ 1892年としたのは雍希宏・朱培麟『重慶文化与交通簡史』（二〇〇三年六月）第二節「重慶開埠与近代重慶交通運輸的發端」第二小節「近代交通運輸的發端」による。